

「いづものくに」の来歴

李 国 棟

【キーワード】「なのくに」、「つまのくに」、「いづものくに」

出雲地方の歴史は謎に包まれている。『古事記』と『日本書紀』には出雲の神話が数多く記録されており、荒神谷遺跡や加茂岩倉遺跡からは大量の銅剣や銅鐸が出土しているにもかかわらず、その歴史は依然として不明のままである。しかし日本の上古史を復元するには、この謎を解くことは避けて通れない。したがって、本論では敢えてこの難問に挑戦し、「いづものくに」の来歴について考察を進めたい。

1. 「ねのくに」(根国)と「なのくに」(奴国)

『日本書紀』^(注1)には、出雲の英雄素戔鳴尊すさのそのみこと(『古事記』では「須佐之男命」と表記されている)が天照大神の「高天原」で悪事を働いたため、「ねのくに」へと追放されたことが記されている。

既に諸の神、素戔鳴尊を責めて曰はく、「汝が所行甚だ無頼し。故、天上に住むべからず、亦葦原中国にも居るべからず。急に底根の国に適ね」といひて、乃ち共に逐降ひ去りき。(中略)是の時に、素戔鳴尊、天より出雲国の簸の川上に降到ります。時に川上に啼哭く声有るを聞く。故、声を尋ねて覓ぎ往ししかば、一の老公と老婆と有りて、中間に一の少女を置ゑて、撫でつつ哭く。

「高天原」から追放された素戔鳴尊は「出雲国の簸の川上」で「老公と老婆」と出会った。その後、ストーリーは素戔鳴尊が「老公と老婆」の娘クシイナダヒメを食おうとしたヤマタノヲロチを退治し、クシイナダヒメを娶って王国を樹立する方向へと展開していったのだが、以上の引用から、同じ出雲地方を指しているのに「底根の国」と「出雲国」という2つの国名が用いられていることが分かる。そして、このストーリーの内容から分析してみると、「底根の国」の「底」は単に政治的な上下関係による修飾語にすぎず、上古時代では、出雲地方は実際に「ねのくに」と呼ばれていたように思われる。すなわち出雲地方には、「いづものくに」が成立する以前に、まず「ねのくに」が存在していた。「底根の国」が先、「出雲国」が後という『日本書紀』の記録順序は、「ねのくに」が年代的に「いづものくに」よりずっと古かったことを端的に物語っているのである。

日本の歴史学者武光誠氏は『邪馬台国がみえてきた』^(注2)の第3章で次のように述べている。

弥生時代中期のはじまる紀元前一世紀末に、北九州と大陸との交渉が急にさかんになり、北九州の小国が栄えはじめた。そして、その二、三〇年後には出雲にも大陸文化が及んだ。つまり、弥生時代中期前半にあたる一世紀前半には北九州の沿岸部から出雲にかけての地域が先進地をなしていたのである。

1世紀前半には九州北部から出雲にかけての地域が先進地域であった、という指摘は非常に重要であり、これは当時、九州北部と出雲地方が一体となっていた実態を反映しているのではないかと考えられる。1世紀前半の九州北部では、後漢の光武帝から「漢委奴国王」の金印（写真1）を下賜された「なのくに」（奴国）が栄えていた。この点から考えると、出雲地方に多大な影響を与え続けたのはこの「なのくに」であったと推測される。「なのくに」の歴史的背景について、『福岡県の歴史』^(注3)の第1章は次のように紹介している。

この金印をもらった王（金印奴国王とよぶ）よりも五〇年以上前の紀元前一世紀末の王の墓が、奴国では春日市須玖岡本D地点、伊都国では前原市三雲南小路の1・2号の甕棺墓である。これらは、副葬品の主体が朝鮮系から中国系にかわる中期後半の時期で、三〇枚以上の前漢の銅鏡や天のシンボルである璧（ガラス製）をはじめ多くの副葬品をもつ。（中略）また、須玖岡本D地点も一辺二〇メートルを越す墓域をもつようで、その横にも二〇人ほどを一つの墳丘に葬った墳丘墓があり、王墓—墳丘墓—群集墓という序列と一致する。この序列は『後漢書』東夷伝に示される金印国王—大夫—一般の人びとという序列と一致する。重要なのは、王墓でみられた鏡をはじめとする青銅器がこの墳丘墓ではいっさいない点で、王への権力の集中を裏づける。

以上の考古学的調査によって、「なのくに」（奴国）が博多平野に実在し、しかも前漢時代からすでに中国大陸と正式に交流していたことが明らかになったわけだが、しかし、前漢時代から中国大陸と交流した国は100余りあったのに、なぜ「なのくに」だけが「漢委奴国王」の金印をたまり、倭国を代表する王に選ばれたのであろうか？ 日本の歴史学界では、これまで「なのくに」は有名なわりには「小国」であり、大きく見積もっても博多平野を超えないだろうと考えられてきた。しかし、「なのくに」が単に博多平野の中の一小国にすぎないのであれば、本当に倭国全体を代表する金印をたまわる資格があったのだろうか？ この問題について、武光誠氏は前掲の『邪馬台国がみえてきた』の第6章でこのように解釈している。

なぜ後漢朝はここまで格の高い印章を、小国の首長に与えたのであろうか。そこに、中国人の先を見越した意図がある。彼らは、交易の拠点としての良港である博多湾を支配する奴

国の首長を倭人の代表として選び、これを育成して中国人と倭人との間の斡旋を一括して委託しようともくろみていた。

これは、倭の百余国にいちいち対応する手間をはぶくものであった。（中略）

後漢時代の中国人からみれば、倭人は前漢代と同じく辺地の役所楽浪郡に来て交易するだけの存在でかまわなかった。しかし、新たな後漢朝をひらいた光武帝には、東の彼方の大国が自分の徳を慕って従ったことは宮廷の人びとに広言する必要があるあった。

そのため、奴国を実際以上の大国として扱い、濊や韓が与えられた県侯や邑君よりはるかに高位の王位を与える行為は中国の王朝の側の政治的意図によってなされたといえる。

博多湾一帯を統治した小国の王に、後漢の光武帝があえて王位を与えたのは、交易上の必要性和政治的な利用価値があったからだ——このような解釈には確かに一理ある。しかし、実力だけが物を言う政治の世界では、交易上の必要性和政治的な利用価値があるだけで王位の象徴である金印を与えることはまずありえない。貢ぎ物の何倍、何十倍もの下賜品を与えることはよくあったが、一国の支配権の象徴である金印は下賜品と全く次元を異にしている。すなわち、「なのくに」が「漢委奴国王」の金印をたまわったのは、何よりも「なのくに」が当時の日本列島で最大最強の国であると中国側に認識されたからであろう。筆者の考えでは、「なのくに」は決して博多平野ほどの面積しか持たない小国ではなく、「漢委奴国王」の金印をたまわった時には、九州北部から出雲にかけての広大な地域を支配する大国であった。前述したように、出雲一帯はかつて「ねのくに」と呼ばれていた。実はこの「ねのくに」はつまり「なのくに」なのである。「ね」と「な」は音韻上通用するだけでなく、次節で述べるように、ともに「稲」をも意味しているのである。

そもそも九州北部は早い時期に稲作が伝来した地域である。したがって「なのくに」がこの新しい文化を武器に、自国の支配地域を地理的につながっている出雲地方へと拡大したのは、きわめて自然なことであっただろう。そしてその結果、紀元後1世紀前半ついに「なのくに」は日本列島における唯一無二の大国に成長していた。このような実力があつたからこそ、紀元57年に後漢の光武帝から倭国全体の支配権を意味する「漢委奴国王」の金印をたまわることができたのだと筆者は考える。

2. 「なのくに」(奴国)の「な」の由来

「奴国」の「奴」は当時の和語音に基づいた漢字の当て字である。李珍華・周長楫編撰『漢字古今音表（修訂本）』(注4)によると、秦漢までの上古時代では、「奴」は「nu」とは発音されておらず、「na」と発音されていたという。すなわち、「奴国」が存在した時代の「奴」は「na」と発音されており、この「奴」が和語の「な」の当て字として用いられたのである。

それにしても、なぜ「なのくに」の人びとは自分の国を「なのくに」と呼んでいたのだろうか？

筆者の考えでは、稲作の伝来がその根本的な理由である。稲作の起源は中国の長江中流域にあり、その最初の担い手は苗族であった。苗語では稲を「nna」あるいは「nei」と言うが、これらを和語に直すと、「な」あるいは「ね」となる。「nna」「nei」の接頭語「n」も場合によっては一音として認定できるので、苗語「nna」と「nei」が日本に伝わった当初は、「な」「ね」以外に、「んな」「んね」とも発音されたはずだ。しかし、「んな」「んね」は発音上不安定なので、「んな」は「にな」を経て「いな」に、「んね」も「にね」を経て「いね」に変化してきたと考えられる。

清水秀晃氏は『日本語語源辞典——日本語の誕生』^(注5)の「いね」の項で、「いね」の「い」について次のように述べている。

忌み、けがれの観念は古代では生活・生命とともにあった。常に清浄潔斎を意図し、神意をおもんばかり、同族の名誉を重んじた。イ音を鳥瞰すれば、そういう古代の心が明らかに浮かんで来る。忌み＝すなわち生活・生命という観念は、その後の日本的な心情の緒である。それはもっとも弥生農耕的であって、それ以前の狩猟によって生きた縄文のものではない。イ音を全体的に見ると、日本語の原形が、農耕初期の、しかも最も神とともに歩んだ時代の産物であることが、一と目でわかる。そういう重要な内容をもつものがイ音である。特に稲という言葉は、生命のもと＝「生根」であるとともに、「忌根」であり、清浄潔斎な生活をまかなう根幹的なものであった、という一例をあげて、イ音のもつ意義を強調しておこう。

「いね」の「い」を神聖の意とするこの意見に、筆者は全面的に賛成である。この神聖性を意味する「い」は接頭語であり、ある名詞の前につけてその名詞に神聖の意を付け加えて強調しているわけだが、この接頭語としての「い」はどのように生まれたのかと問われれば、筆者は稲を表す苗語「nna」「nei」の「n」から変化したものだとして主張したい。「n」はもともとその後の「na」と「nei」を強調する接頭語であり、その役割が「い」と全く同じだからである。この角度から見ても、日本列島の稲作が長江中流域とつながっていることが明らかになるのである。

もちろん、「なのくに」の稲作は長江中流域から直接伝わってきたのではなく、朝鮮半島を経由して伝わってきたと思われる。今から12000～14000年前、長江中流域の鄱陽湖から洞庭湖にかけての地域に生活していた苗族が稲作を始め、「稲」を「nna」と命名した。10000年前から稲作は長江下流域へと伝わっていったが、長江下流域でも、「稲」は苗語の「nna」と呼ばれていた。現在の広西チワン族自治区、広東省、貴州省、雲南省にたくさん残っている漢語音訳地名「那良」「那羅」「那勞」「那孟」「納雍」「西双版纳」などの「那」あるいは「納」がすべて「nna」と発音され、「稲」あるいは「稲田」を意味しているのがその証左である。4600年前から、稲作は長江下流域から山東半島に伝播し、4000年前以降、さらに山東半島から朝鮮半島に伝播したが、「稲」の呼び名は依然として「nna」のままであった。「稲」を意味する朝鮮語「**나**」(な)、「水稻」

を意味する「나라」(ならっ)がその証拠である。2500年ほど前、稲作はついに朝鮮半島から九州北部に伝わってきて、唐津湾の菜畑遺跡がその例証であった。「菜畑」の「な」は実際には野菜の「菜」を意味するのではなく、「稲」そのものを意味するのである。その後、稲作が菜畑遺跡を始点として、糸島半島、博多平野と次第に九州北部へ普及していったが、稲作のこの伝播はちょうど「なのくに」の建国時期と重なっているのである。一方、稲作の伝播過程においては「稲」の苗語音「nna」の転音「nei」も稲作とともに九州北部に入ってきた。和語の「ね」と「いね」がその証拠である。こうしてみると、博多平野に出現した「なのくに」は実際には「稲」で命名された「稲国」であったことが分かり、この「稲国」は稲作を出雲地方に伝え、この地に対する遠隔支配を始めたと考えられる。もし出雲側から見るとすれば、稲作を背景とした「なのくに」の遠隔支配はまさに出雲地方史の原点であったといえよう。

3. 「つまのくに」の建国と荒神谷の銅剣

考古学的に見ても、出雲地方と九州北部のつながりは非常に緊密である。たとえば出雲花仙山産の碧玉は福岡県前原市に比定された「いとのに」(伊都国)の潤地頭給遺跡から出土しており、「いとのに」で作られた土器の破片はまた出雲市の中野清水遺跡から出土している。「いとのに」は「なのくに」のすぐ隣に位置していたと『魏志倭人伝』に記載しているので、これらの出土品は3世紀中葉までの九州北部と出雲地方の一体化を示しているものだと理解することができる。

とはいえ、「なのくに」の都があった博多平野から見ると、出雲地方はやはり遠い辺境であり、都の人びとはその地域を軽視して「つま」(端)と呼んでいたと思われる。もちろん、中央政府の統治が強かった時にはそう呼んでいてもかまわなかったが、しかし中央政府の統治が弱くなると、「つま」地域の人びとは逆に辺境という条件を利用して「なのくに」から独立し、「つまのくに」を樹立したのではないかと推測される。『魏志倭人伝』によると、3世紀前半には「奴国」と「邪馬臺国」との間に「五万余戸」の大国「投馬国」があったという。筆者は、この「投馬国」こそが「なのくに」から分離独立した「つまのくに」であったと考える。「投馬国」の「投馬」がある和語の当て字であったことは言うまでもない。しかしその和語が何であったのかについては定説がなく、「つま」説、「とま」説、「さつま」説が比較的有力である。そしてこの3説のなかで、筆者は「つま」説を支持する。前掲の『漢字古今音表(修訂本)』は「投馬」の上古音を[do meə]と復元しているが、この音が模倣した和語音は「とうま」であったように思われる。和語には[ɔ]という母音がなく、[ɔ]と近似している音として「おほ」が想像される。しかし、「うし」(牛)の「う」が「おほしし」(大獣)の「おほ」より変化してきた^(注6)ことが示唆しているように、上古時代の「おほ」が発音上安定せず、[ɔ]が実際に同系列の安定音[u]を表している可能性が極めて高い。もちろん、「とうま」の「とう」も唇をほとんど窄めない和語の発音習慣では発音しにくく、数多くの倭人は「とうま」をより容易な発音「つま」で発音していたので

はないかと推測される。外国人に説明するなど正式な場合には「とうま」と正確に発音できただろうが、しかし倭人同士の場合は、やはり「つま」と発音していたのであろう。要するに、「投馬国」は「つまのくに」の漢字による当て字であり、3世紀前半、中国の使者が出雲地方を通った時には、「なのくに」の「つま」地域はすでに「つまのくに」（投馬国）として独立していたのであった。

「つま」という言葉はもともと「端」の意であると同時に、「妻」の意味をも持ち合わせていた。多くの古語辞典が、妻問い婚をおこなうために本家の端（つま）に妻屋を建てたことが「妻」の意の「つま」の原義だと指摘しており、筆者も全く賛成である。ただここではもう少し、妻問い婚という制度に「辺境」と「妻」の接点が内在している点を強調したい。そもそも妻問い婚であれ、普通の婚姻であれ、一国を支配する王の婚姻はほぼすべて政略結婚であり、その目的のほとんどは新開地あるいは国の辺境を固めることにあった。「ねのくに」に天降った素戔鳴尊はヤマタノヲロチを退治してクシイナダヒメと結婚するときに、「八雲立つ、出雲八重垣、妻籠みに、八重垣作る、その八重垣を」という歌を詠んだが、この歌には実際に天つ神が国つ神の娘を妻にすることと、「ねのくに」の辺境を固めることの二重の意味が含まれている。要するに、「つま」という地名には、「つまとい」（妻問い）による「つま」（辺境）固めの歴史が濃厚に凝縮されているのである。

現在、「投馬国」を広島県福山市の鞆の浦一帯と比定した学者と、博多平野から見ればほぼ等距離の出雲地方と比定した学者がいる。鞆の「とも」と「投馬」の「とうま」は発音上確かに近い。しかし考古学的証拠をふまえて考えると、3世紀の鞆の浦一帯に「五万余戸」の人口がいたとは到底考えられず、出雲地方と比定した意見の方が妥当なように思われる。縄文・弥生時代にあつては、九州北部から北越地方にかけての日本海沿岸が日本列島の表玄関であり、その航路は中国大陸や朝鮮半島と交易・交流する上で生命線のような意義を持っていた。したがって、3世紀に中国の使者を奈良盆地にあった「邪馬臺国」へ案内するとすれば、瀬戸内海側ではなく、日本海側の航路が用いられたはずである。「奴国」を経て関門海峡九州側の「不彌国」（ふみのくに）に到着した中国の使者は、関門海峡を渡って日本海側を北上し、「水行二十日」後ついに「出雲地方」にあった「つまのくに」（投馬国）に到着した。そこからさらに「水行十日」を費やして若狭湾の「敦賀に上陸し、それより越前・近江・山城を経て、陸行一箇月を費やして大和に入つた」のだ——日本の学者笠井新也氏は1922年すでにこのように指摘しており^(注7)、筆者も近年の研究を経て、ほぼ同様な結論に至った。

「つまのくに」（投馬国）がいつ「いづものくに」（出雲国）と呼ばれるようになったのかについてまだ定説がないが、4世紀中葉以後のことであったように思われる。「いづも」の語源については「いづみ」（泉）説、出る雲説、アイヌ語説など、すでに多くの説が出されているが、筆者は新たに「つま」説を唱えたい。「いづものくに」（出雲国）の前身は「つまのくに」（投馬国）

であった。「つま」の前に神聖性を加える接頭語「い」がつけられて「いづま」となり、のちに「いづま」が発音しやすい方向へ変化すると、「いづも」となったのではないかと考えられる。しかし、『魏志倭人伝』が記録した3世紀の出雲地方には、このような変化がまだ起こっておらず、よってこの地域は「つまのくに」（投馬国）と記されたのである。

1984年7月、島根県斐川町荒神谷遺跡から358本の銅剣が出土した。その翌年には、銅剣の出土場所のすぐ近くから、6個の銅鐸と16本の銅矛が出土した。358本の銅剣の出土は日本の考古学史上最大の銅剣発見であり、古代出雲の歴史的地位が一気に高まったわけだが、しかし、これらの銅剣・銅鐸・銅矛が誰のものであったかについては、今日でもまだ明確な結論が得られていない。武光誠氏は『古代出雲王国の謎』^(注8)と題する著書の第5章で、「この遺跡は、荒神谷遺跡周辺あるいは出雲郡だけを押しさえる豪族が残したものではなく、出雲全体をまとめる勢力がつくったものであり、「多量の祭器は、有力な首長個人のために集められたものではなく、出雲の首長の連合が行った祭祀のために使われたもの」だと指摘した上で、出土した銅剣数358本と『出雲国風土記』にみえる神社数399社の間に対応関係を見出す独自の見解を発表している。

358本の銅剣は4列に分けて埋納されていた。A列は34本、B列は111本、C列は120本、D列は93本であったが、古代の出雲も4つの地域に分けられていた。1つ目は意宇郡、2つ目は島根半島にある島根、秋鹿、楯縫の3郡、3つ目は出雲郡、4つ目は神門、飯石、大原、仁多の4郡であった。それぞれの地域の神社数と銅剣の数を見ると、意宇郡の神社数67社と銅剣A列の34本、島根、秋鹿、楯縫の3郡の神社数113社と銅剣B列の111本、出雲郡の神社数122社と銅剣C列の120本、神門、飯石、大原、仁多の4郡の神社数97社と銅剣D列の93本が、それぞれ対応関係をなしている。このような対応関係をふまえて武光氏はさらに、意宇郡の出雲氏と出雲郡の神門氏の連合による出雲の東西統一を推定し、「二世紀なかばの出雲で狭い地域を押しさえる首長三百五十八人が」「自家の祭器である銅剣を一本ずつもちよって、大国主命を荒神谷遺跡で祀った」と結論づけた。筆者は武光氏のこの分析に大筋では賛成であるが、一点だけ修正したい。意宇郡の出雲氏と出雲郡の神門氏の連合による出雲の東西統一は実際に前述した「つまのくに」の誕生を意味しているのである。すなわち、358本の銅剣は「なのくに」からの独立と「つまのくに」の建国を宣誓する印であり、荒神谷遺跡で行われた集団祭祀は「大国主命」を「祀った」ものではなく、大国主命がみずから主催した「つまのくに」の建国式典だったのではないかと考えられる。このように「つまのくに」の建国と荒神谷遺跡の銅剣を結びつけて考えて、はじめて荒神谷遺跡の銅剣が持つ重大な意義を理解することができるのである。

2世紀中葉、荒神谷遺跡で行われた式典によって「つまのくに」が樹立され、初代王大国主命が誕生した。もちろん『古事記』と『日本書紀』では、大国主命は天照大神の弟である素戔鳴尊の5世孫または6世孫とされている。しかし、この親族関係は後世の操作だと筆者は考える。なぜなら、大国主命が本質的に稲作と強く結びついているのに対し、素戔鳴尊と稲作の関係は付随

的なものに過ぎないからである。素戔鳴尊が「ねのくに」に降臨したときには、そこでは稲田がすでに普及していた。そのことは、国つ神の娘で後に素戔鳴尊の妻となる娘がクシイナダヒメ(奇稲田姫)と名乗っていることから分かる。記紀には素戔鳴尊がヤマタノヲロチを退治し、その尻尾からクサナギノツルギを取り出したことも記されているが、この点からも察せられるように、素戔鳴尊の本質は稲作ではなく、鉄製武器の製造にあったのであった。

もちろん、大国主命にも「八千矛神」という別名があるため、一見彼も金属製の武器に強い関心を持っていたかのように見える。しかしよく検討してみると、大国主命が所持していたのは実際に荒神谷から出土したような祭祀用の銅剣や銅矛や銅鐸に過ぎず、彼が活躍していた2世紀中葉の日本列島には、鉄がまだ普及していなかった。すなわち、後世の人が出雲地方に対して抱いた鉄のイメージは、大国主命より200年ほど遅れて登場した素戔鳴尊によってもたらされたものであり、「つまのくに」はもともと稲作と青銅器の国であったのだ。

4. 「つまのくに」と「なのくに」と「こしのくに」

大国主命は「なのくに」(奴国)に対して独立を宣言し、「つまのくに」(投馬国)を樹立した。これによって出雲地方の歴史は第2段階に入ったわけだが、しかし「つまのくに」の発展は決して容易なことではなかった。

1665年、出雲大社近くの摂社「命主社」から弥生時代の銅戈(写真2)と同時代の翡翠の勾玉(写真3)が出土し、現在、出雲大社宝物館に所蔵されている。銅戈は九州北部で作られたもので、勾玉はまた越後産の翡翠で作られていることから、弥生時代の出雲地方が九州北部と北越の両地域と密接にかかわっていたことが判明する。この「命主社」について、第82代出雲国造千家尊統氏は『出雲大社』^(注9)の第10章で以下のように紹介している。

この出雲の森からさらに東に一丁いくと境外摂社「命主社」がある。『出雲国風土記』には「御魂社」と見え、『延喜式』神名帳にも記載されている。祭神は神産巢日神で、大国主の神が兄の八十神から焼石の御難にあわれたとき、蚌貝比売、蛤貝比売の二神をお下しになり、その難を救われたというのである。

この神社は『古事記』の蚌貝比売、蛤貝比売の二神が大国主命を再生させた話を縁起とするめでたい社である。しかしその一方で「蚌貝比売と蛤貝比売」の話には大国主命の数々の受難が記されている。したがってこの点からその銅戈と勾玉の意味を考えると、これらの品は決して単にめでたい結果を強調しているとはいえなくなる。おそらく「つまのくに」が樹立された直後から、九州の「なのくに」(奴国)と北越の「こしのくに」(越国)から何回も攻撃されただろう。しかし最終的には、大国主命の忍耐や政略結婚などの手段によって相手の戦意が解消されたのみならず、

相手方の2社が逆に出雲大社の摂社として押さえられるほど「つまのくに」が栄えたのであった。

大国主命には本妻須勢理毗売のほか、また2人の重要な側室がいた。九州北部の「宗像三女神」の中の多紀理毗売はその一人であったが、彼女がなぜ大国主命と結婚したのかについて考えると、宗像産神が海上交通を司る「道主貴」であったことが非常に示唆的である。現在、大国主命を祭神とした出雲大社本殿の西側には筑紫社が建てられており、多紀理毗売はその祭神となっている。この点から見ても、多紀理毗売によってもたらされた海上交通の安全が大国主命の「つまのくに」にとっていかに重要であったかがよく分かるのである。

もう一人の側室は沼河比売という。彼女は出雲大社の中に祭られてはいないが、大国主命がはるばると「こしのくに」まで彼女に求婚に行ったことが『古事記』に記録されている。「こしのくに」の中心は富山湾から新潟県糸魚川市の姫川にかけての地域であり、玉器や上質の蛇紋岩石器の製作と交易がその生業であった。姫川は上古時代「ぬなかわ」（沼名河または沼河）といい、翡翠などの玉を産出していた。また、富山湾の海辺には荒波によって海底から玉や蛇紋岩の原石が無尽蔵に打ち上げられていた。これらの玉や蛇紋岩の石器は、縄文中期から日本各地へと交易されていただけでなく、長江下流域にも交易されたのではないかと考えられる。拙稿「こし（越）の来歴」^(注10)で述べたが、筆者は2008年2月2日、富山県朝日町の「まいぶんKAN」で、長江下流域の良渚玉鉞と同タイプの蛇紋岩鉞（不動堂遺跡出土）や、長江下流域の良渚玉璜と通じる滑石璜（柳田遺跡出土）を発見し、日本海側の「こし（越）」と長江下流域の越地方が縄文中期に交流していた証拠をつかむことができた。「こし（越）」と長江下流域の越地方との海上交通から見ると、「つまのくに」が地理的に非常に重要な位置を占めていた。おそらく「つまのくに」建国の背景には、「こしのくに」と長江下流域の越地方との交易を仲介することで莫大な財源を得ていたという事情があったのではないかと考えられる。したがってこの意味では、大国主命と沼河比売の婚姻は実際にその交易航路の確保を目的とした政略結婚であったといえよう。

荒神谷遺跡から出土した大量の銅剣や銅鐸や銅矛の生産地について、これまで現地生産説や九州北部生産説、朝鮮半島輸入説が提出されている。しかし筆者はここでもう一つの可能性を指摘したい。2006年2月10日、『産経新聞』や『中国新聞』などが一斉に報道したが、長江下流域の江蘇省無錫市で見つかったある越国の貴族の墓（紀元前470年前後）から、日本の弥生時代の銅鐸と似た形状の青磁鐸が出土した。「日本の銅鐸は、中国大陸を起源とする鈴が朝鮮半島から伝わり独自に発展した」というのが現在の定説であるが、この墓の発掘調査を担当した南京博物院考古研究所の張敏所長は「鐸が中国南部の越から日本に直接伝わった可能性がある」と指摘している。弥生時代の幕開けを意味する稲作は、その一部が紀元前3世紀長江下流域の越国から直接伝わってきたことがすでに明らかになっている^(注11)ので、稲作の祭器である銅鐸もほぼ同時期に、同じルートを通して長江下流域の越国から直接伝わってきたと考えた方が自然であろう。

こうした方向から考えると、「つまのくに」が「こしのくに」と長江下流域の越国との玉交易

を仲介した意義がより明らかになる。「つまのくに」は越国のために「こしのくに」からの玉石や蛇紋岩石器の輸出を仲介し、その仲介手数料として越国側から長江下流域の銅剣、銅鐸、銅矛を大量に入手することができたのではないだろうか。すなわち、荒神谷遺跡から出土した銅剣・銅鐸・銅矛の多くは、長江下流域の越国で造られたもので、しかも朝鮮半島を経由せず、直接長江下流域から「つまのくに」に入った可能性があるのである。

5. 鉄の伝来

しかし4世紀中葉に入り、素戔鳴尊という新しい神が出雲地方に到来すると、「つまのくに」の情勢が一変した。素戔鳴尊の神格について、真弓常忠氏は『古代の鉄と神々〈改訂新版〉』^(注12)と題する著書の第4章で次のように分析している。

かくして、出雲国におけるスサノヲノミコトの活躍と、古代製鉄の痕跡から、私見はスサノヲノミコトを鉄神とみているが、吉野氏もかねて素尊鉄神論を展開されていた。吉野氏は、前記『出雲国風土記』飯石郡須佐卿の条にみえる、スサノヲノミコト鎮魂伝説の検討から、スサノヲノミコトとは〈渚沙^{すさ}の男〉、すなわち海や河の洲（渚）に堆積した砂鉄を対象として製鉄に従事する男性集団を意味する、と説かれ、八雲郡八雲村熊野鳥村の通称「金屑山」の谷間で、弥生時代中葉以降のものとみられるタタラ炉の跡がみつきり（昭和四十五年）、また松江市西忌部町柳原の標高二〇〇メートルの花崗岩中より、弥生時代末期の溶鉄炉跡が発見されていることから、弥生時代中・後期にはこの方面で製鉄のはじまっていたことを示唆され、前述の松本一号墳が、川砂鉄産地の真只中に成立した鍛冶屋古墳であるとされたのである。

語源的には素戔鳴尊^{すさのをのみこと}の「す」は確かに「沙」と考えられる。「さ」も「さぶ」「さびる」が示しているように「鉄」の縁語であるので、当然「すさ」を砂鉄と解釈することができる。それと同時に、「す」には「透く」「透き通す」などの派生義があるので、敵を「透き刺す」武器や、宮殿、古墳など大型建造物造営時の「透く」工具なども連想される。

日本列島に鉄を伝えたのは朝鮮半島からの渡来人である。日本列島の製鉄の始まりは1世紀中葉にさかのぼることができるが、本格的な製鉄はやはり4世紀後半以降を待たなければならなかった。『日本書紀』の「一書」によると、素戔鳴尊は「高天原」で罰を受けた後、まず朝鮮半島の「新羅」の「曾戸茂梨^{そしもり}」に降臨した。しかし住み心地が良くなかったので、また「埴土」で作った舟に乗って「出雲国の簸の川に所在の鳥上の峯」に移住してきたという。日本の鉄文化における朝鮮半島ルートと素戔鳴尊の到来時期から考えれば、この伝説には相当な信憑性がある。「新羅」が統一された大国として現れたのは356年である。「新羅」は鉄の産地であり、その国名「し

らぎ」の「しら」も、素戔鳴尊の最初の降臨地「そしもり」も、『日本書紀（一）』^(注13)が注釈しているように「鉄」を意味する。古代朝鮮語では、「さ」「し」「そ」は互いに音転関係にあり、いずれも「鉄」の意であるから、古代朝鮮語の「さ」と素戔鳴尊の「さ」は互に通じているように思われる。この点から判断すると、彼はもともと「新羅国」の製鉄者であっただろう。しかし「新羅国」の統一前後、彼は何らかの理由により国を追われたため、製鉄という高度な技術を頼りに新天地を目指し、鉄資源が豊富だが製鉄の技術がまだなかった出雲地方に渡来してきたのではないかと考えられる。

鉄器が珍重されていた4世紀後半、製鉄に精通した素戔鳴尊は、当然のことながら出雲地方で神聖な「神」、そして非凡な王として崇められていた。その結果、稲作本位の「つまのくに」が製鉄という新たな神聖性を獲得でき、従来の国名「つまのくに」の前に神聖性を意味する接頭語「い」が冠されて「いづまのくに」となった。そしてのちに、「いづまのくに」が音韻上さらに発音しやすい方向へ変化すると、「いづま」が「いづも」と発音され、「いづまのくに」が「いづものくに」に変わったのだと推測される。要するに、神聖の意の接頭語「い」はここでは鉄器の持つ神聖性を意味するので、「つまのくに」が「いづま(も)のくに」に変わった時期は、やはり鉄器革命が遂行可能な4世紀後半であったと判断した方が妥当であろう。

以上をまとめると、素戔鳴尊は朝鮮族の製鉄の達人であり、稲作を本質とする大国主命とはもともと何の関係もなかった。歴史的順序からいえば、大国主命は実は素戔鳴尊より200年ほど前の王であり、決して素戔鳴尊の子孫ではなかった。しかし4世紀後半の出雲地方では、素戔鳴尊がもたらしてきた製鉄技術が、大国主命が持っていた稲作の威力を遙かに凌駕してしまったので、大国主命が素戔鳴尊の子孫、すなわちその下位神に位置づけられたのだと考えられる。要するに、素戔鳴尊の「ねのくに」への降臨物語は、4世紀後半に出雲地方で発生した鉄器革命の歴史を反映しており、この鉄器革命によって「つまのくに」が「いづものくに」に生れ変わり、出雲地方の歴史がついに第3段階に入ったのであった。

6. 「いなさ」の語義

出雲大社の近くには稲佐の浜があり、毎年旧暦10月10日に「神迎祭」が行われる。八百万の神々が海上からやってきて、そして海蛇を先導とした神社関係者に迎えられ、出雲大社へと案内される。すでに多くの指摘があるとおり、蛇は稲作の豊饒神なので、「神迎祭」は稲作祭りのイメージが強い。地名「いなさのはま」の「いな」は稲の意で、「はま」は日本列島の「端の間」を意味する。しかし、日本列島の「端の間」はまた海を隔てて長江下流域や朝鮮半島の稲作文化と直接的に接しているので、稲佐の浜で行われる「神迎祭」は実際に稲作が海外から伝わってきたことを象徴しているのである。

日本全国の神々が「いなさのはま」に上がった後、「出雲大社」で「神在祭」を執り行い、次

の年の農事について相談をする。その期間中、海蛇は「龍蛇神」としてずっと祭り上げられる。こうした点から見ると、この「いなさのはま」は日本列島における稲作文化の発信地でもあったように思われる。伝説上、大国主命には181人の子供がいる。この181人の子供はおそらく大国主命の指示で日本各地へ派遣された稲作の伝道者であっただろう。

ところで、旧暦とはもともと稲作暦であり、稲作の発祥地である中国の長江中流域ではかつては1年が10ヶ月に分けられていた。1ヶ月は36日で、1年は360日であった。1年が終わると5日間ないし6日間の「年越し」期間が設けられ、それは1年の内には数えられなかった。考えてみると、出雲大社の「神迎祭」から「神在祭」までの1週間はまさにこの稲作暦の「年越し」期間と一致する。日本では旧暦10月を神無月という。つまり旧暦10月になると、日本のどこにも神が居なくなり、みな出雲大社に行ったということであるが、1年10ヶ月の暦では10月は一年最後の月なので、その時に日本の神々が出雲大社に集合するということは実際に彼らが帰省することを意味する。したがって、「神迎祭」から「神在祭」までの1週間はまさに10ヶ月暦では暦に数えられない1週間ほどの「年越し」期間だと考えられる。すなわち、出雲大社のこの祭りは疑うことなく長江中流域の大昔の10ヶ月暦を引き継いでいるのである。

もちろん、八百万の神々はすべてが稲作の神というわけではなかった。「いなさ」という地名から判断すると、「いな」の神と「さ」の神——この2種類の神がいたわけだが、「いな」は念を押すまでもなく稲の神であった。それでは、「さ」はどんな神であったのだろうか。「さ」の原義について、一部の人は稲だと主張している。「さなえ」の「さ」、「さくら」の「さ」、そして「さだ」神社の「さ」、これらはみな稲の意だと解釈することができる。しかし「いなさ」という地名は、語構成の次元からこの意見を否定している。「いな」がすでに稲を意味しているので、その後さらに稲を意味する「さ」をつけると、完全に蛇足となってしまい、このような語構成はまず考えられないからである。筆者の考えでは、和語としての「さ」はもともと形容詞であり、「小さい」や「真の」の原義を持っている。「さなえ」はすなわち「小さい苗」であり、「さだ」は「真の田」である。「さくら」の「さ」が形容詞の「さ」なのか、それとも動詞「さく」の「さ」なのかについてはまだ検討する余地があるが、もし動詞「さく」の「さ」だと理解すれば、やはり前節で述べた鉄の意の「さ」に由来しているように思われる。したがって、「いなさのはま」で迎えた八百万の神には、稲の神と鉄の神がいるわけで、「いなさのはま」が日本列島の稲作文化の発信地だけでなく、鉄文化の発信地でもあったことがこれによって判明するのである。

また、「いなさ」の「いな」が先、「さ」が後という語順から、時代的には稲作の神がまず海外からやってきて、次に鉄の神も海外からやってきたということが分かる。『古事記』や『日本書紀』では、鉄の神である素戔鳴尊が出雲地方の祖先神として語られているが、それは決して歴史的事実ではない。「いなさ」という地名は言語的化石として、稲作の神が素戔鳴尊より先に簸の川流域にやってきて、稲作を普及させていたことを客観的に物語っているのである。

7. 「いづものくに」の滅亡

素戔鳴尊が鉄器を以て「いづものくに」を樹立した後、「いづものくに」は神聖な大国として大いに繁栄していた。しかしのちに近畿の「やまとのくに」と争った結果負けてしまい、併合されてしまった。『古事記』に記された「国譲り」の話がその反映である。

日本の歴史作家井沢元彦氏はその著『逆説の日本史1 古代黎明編・封印された「倭」の謎』^(注14)の第2章で、出雲大社は「死の宮殿」だと指摘し、その証拠として注連縄の「右上位」の緋い方(写真4)と「四柏手」を挙げている。筆者はもちろん井沢氏の意見に賛成であるが、ただ注連縄の「右上位」の緋い方については、もう少し補足してみたい。実は、注連縄の「右上位」の緋い方をしている神社は出雲大社のほかに、数社ある。たとえば、島根県意宇郡の熊野大社、奈良県櫻井市の大神神社、愛知県津島市の津島神社がそうである。熊野大社の祭神は須佐之男命、櫛名田比売、伊邪那美命の3神であり、大神神社の祭神は大物主、津島神社の祭神は須佐之男命と大穴牟遲神である。祭り上げられている祭神は多いが、須佐之男命がその中心にいることは明らかである。熊野大社の櫛名田比売は須佐之男命の妻である。また、大神神社の大物主と津島神社の大穴牟遲神は大国主命と同一人物なので、須佐之男命の5、6代目の子孫とされる。要するに、祭神たちはみな須佐之男命とつながっており、この事実は、注連縄の「右上位」の緋い方が根本的に須佐之男命とかかわっていることを裏付けているのである。

『古事記』の「国譲り」では、大国主命が天照大神側に国を譲った後に出雲大社に隠れたとされている。しかし前述したように、死を意味する注連縄の「右上位」の緋い方は、根本的に須佐之男命とかかわっているため、「国譲り」の時に死んだのは決して稲作系統の大王である大国主命ではなく、鉄器系統の大王須佐之男命の子孫であったことが分かる。現在、出雲大社の本殿の後ろに、須佐之男命を祭り上げる規模の小さい素戔社がある。一見付随的な存在のように見えるが、出雲大社とそのバックグラウンドである八雲山の位置関係から考えると、八雲山の麓に位置するこの素戔社こそが出雲大社の根元である。この根元から推測すると、「国譲り」は実際には須佐之男命が切り開いた鉄器時代に発生した大事件であり、「いづものくに」はまさしくこの大事件のなかで滅亡したのだと結論づけられよう。

「いづものくに」の滅亡時期について、武光誠氏は前掲の『古代出雲王国の謎』の第2章で、2世紀末に大型化し、4世紀初めに消滅した四隅突出型墳丘墓や、ヤマト政権が相次いで北越と北九州の政権を帰順させ、朝鮮半島にも勢力を伸ばしたことを指摘した上で、「四世紀なかばから、出雲の勢力は急速に衰えたのだ」と結論づけている。さらに同書第7章で、330年前後に造られた造山一号墳と大成古墳から三角縁神獣鏡が一面ずつ出土したことや、350年前後に造られた神原神社古墳から、中国三国時代の魏が卑弥呼に下賜したと思われる「景初三年」の銘文を持つ銅鏡が出土したことを挙げて、「いづものくに」の4世紀中葉滅亡説を補強している。

しかし4世紀中葉の「やまとのくに」には、まだ日本全土を支配するような大王が出現しておらず、「いづものくに」がこの時点で「やまとのくに」に併合されたことはまず考えられない。熊谷公男氏はその著『大王から天皇へ』^(注15)の第2章で、稲荷山古墳から出土した鉄剣の銘文をふまえて、5世紀後半に雄略天皇という日本初の「治天下大王」が出現したと論証しているの、
「いづものくに」が「やまとのくに」に併合されたのは当然その後だと思われる。実は、「五世紀末に出雲郡に住む神門氏の領地の大部分が、雄略天皇の直轄領とされた」と武光氏自身も掲げた『古代出雲王国の謎』の第7章で言及している。筆者の考えでは、これこそが「いづものくに」の滅亡の兆候であった。したがって、「いづものくに」が滅亡し、この地が「治天下大王」の「天下」に治められたのは6世紀前半だと見た方がより自然であろう。事実、「国造」制度の普及も六世紀前半であり、「いづものくに」の滅亡と「国造」制度の普及は表裏一体の関係をなしているように思われる。

出雲大社所在の出雲西部では、四隅突出型墳丘墓が2世紀末に大型化し、4世紀前半まで大規模な四隅突出型墳丘墓が築かれていた。一方、出雲東部の安来一帯では四隅突出型墳丘墓が消失した後、方墳が新たに現れ、4世紀中葉以降、この方墳が主流となった。本論第4節と第5節では、2世紀中葉には「つまのくに」が成立し、4世紀中葉以降「つまのくに」が「いづものくに」に変化したことを述べたが、出雲西部と東部の墳墓形式の変化と結びつけて考えると、四隅突出型墳丘墓の大型化はほぼ「つまのくに」の建国時期と一致し、方墳の出現は「いづものくに」の建国時期とほぼ一致しているということが分かる。つまり、この2種類の墳墓はそれぞれ出雲地方の歴史の変遷の第2段階と第3段階を示していると解釈できよう。出雲地方の内部でいえば、「つまのくに」が出雲西部を中心とした国であったのに対して、「いづものくに」は出雲東部を中心とした国であった。この西部から東部への主導権の移行はそのまま、「つまのくに」から「いづものくに」への変遷を物語っているのである。

しかし、「つまのくに」の中核であった出雲西部に権力の空白地帯が現れると、近畿の「やまとのくに」が出雲西部へ侵入し、400年頃から大和地方と同様の前方後円墳をそこで築き始め、550年頃になると、ついに全長百メートルほどの大型前方後円墳——大念寺古墳を築き上げた。もちろん5世紀の100年間、出雲東部の「いづも」王族は相変わらず方墳および前方後方墳を築き続けていたが、しかし筆者の推測では、遅くとも出雲西部で大念寺古墳が築かれた頃には、出雲東部の「いづも」王族もついに「やまとのくに」とは対抗できなくなってしまい、体よく「国」を「讓」ってしまった。『古事記』では、大国主命が「国」を「讓」る際、天照大神側の建御雷の神に次のように懇願したと記されている。

この葦原の中つ国は、命のまにまに既に献らむ。ただ僕が住所は、天つ神の御子の天つ日継知らしめさむ、と足る天の御巢の如、底つ石根に宮柱太しり、高天の原に氷木高しりて治

めたまはば、僕は百足らず八十垵手に隠りて侍はむ。また僕が子ども百八十神は八重事代主の神を御尾前として仕へまつらば、違ふ神はあらじ。^(注16)

大国主命が大王を退く代わりに自分自身をはじめ、一族の体面を保障して欲しいと懇願しているが、この記述は実際に鉄器時代の話であり、人物の名前を除けば、意外に真実味を帯びているように思われる。出雲大社が天照大神を祭り上げている伊勢神宮よりも立派な鎮魂殿として建立され、「いづものくに」が「やまとのくに」に併合された後も、「いづも」王族には相変わらず方墳あるいは前方後方墳の造営が許されていた。これらの特別な待遇はいずれも「いづも」王族の体面が保障されていたからだと考えられる。

もちろんこの交代劇に関して、表面上は和気藹々としたムードが演出されていた。しかしこれ以降、「いづものくに」の歴代の王は完全に「死鬼」または「怨霊」扱いにされてしまい、「つまのくに」以来日本列島の表玄関として栄えていた出雲地方には「黄泉」や「底根」といった死を連想させる暗いイメージが植えつけられてしまった。これは『古事記』の美辞麗句では決して覆い隠すことができない敗者のきびしい現実であったのだ。

注

1. 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注『日本書紀（一）』岩波書店、1994年9月。
2. 武光誠著『邪馬台国がみえてきた』ちくま新書、2000年10月。
3. 川添昭二・武末純一・岡藤良敬・西谷正浩・梶原良則・折田悦郎著『福岡県の歴史』山川出版社、1997年12月。
4. 李珍華・周長楫編撰『漢字古今音表（修訂本）』中華書局、1999年1月。
5. 藤堂明保監修、清水秀晃著『日本語語源辞典——日本語の誕生』現代出版、1984年7月。
6. 大槻文彦著『新編大言海』富山房、1982年2月。
7. 笠井新也「邪馬臺は大和である」、考古学会編『考古学雑誌』第12巻第7号所収。1922年3月。
www.nexyzbb.ne.jp/~iichirou/sub2.html も参照。
8. 武光誠著『古代出雲王国の謎』PHP文庫、2004年7月。
9. 第82代出雲国造千家尊統著『出雲大社』学生社、1998年8月第2版。
10. 拙稿「こし（越）の来歴」、『広島大学大学院文学研究科論集』第68号所収、2008年12月。
11. 2001年6月23日『朝日新聞』第1版の記事『稲作の「大陸直伝」に物証——大阪と奈良で出土の炭化米DNA分析で判明』。
12. 真弓常忠著『古代の鉄と神々（改訂新版）』学生社、1997年10月。
13. 同1。
14. 井沢元彦著『逆説の日本史1 古代黎明編・封印された「倭」の謎』小学館、1993年10月。

15. 熊谷公男著『大王から天皇へ』講談社、2001年1月。
16. 武田祐吉訳注・中村啓信補訂解説『新訂古事記』角川文庫、1977年8月。

写真注

1. 文化庁監修『国宝12・考古』（毎日新聞社、1984年11月）からの転写。
2. 筆者撮影、出雲大社宝物館蔵。
3. 筆者撮影、出雲大社宝物館蔵。
4. 筆者撮影、出雲大社神楽殿。

附 録

本論で検討した各遺跡の調査報告書は以下のとおりである。

1. 鳥根県教育委員会『出雲神庭荒神谷遺跡』、1996年。
2. 鳥根県埋蔵文化財調査センター『加茂岩倉遺跡』、2002年。
3. 春日市教育委員会『春日市文化財調査報告書第7集・須玖・岡本遺跡』、1980年。
4. 唐津市教育委員会『唐津市文化財調査報告書第5集・菜畑遺跡』、1982年。
5. 前原市教育委員会『潤地頭給遺跡Ⅰ』、2004年。
6. 国土交通省中国地方整備局・鳥根県教育会『大津町北遺跡、中野清水遺跡』、2004年。
7. 富山県朝日町『国指定史跡・不動堂遺跡——その概要と整備のあらまし——』、1982年。
8. 朝日町教育委員会『富山県朝日町柳田遺跡発掘調査報告書』、2003年。
朝日町教育委員会『富山県朝日町柳田遺跡発掘調査報告書Ⅱ』、2005年。

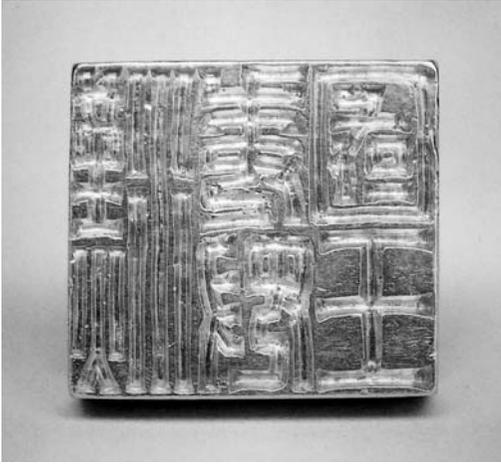


写真1



写真2



写真3



写真4

日本“出云国”的来历

李 国 栋

本文从稻作文化传播的视角，综合语言学、考古学、民俗学等方面的证据，深入地探讨了日本“出云国”的历史渊源。

《三国志·魏书·乌丸鲜卑东夷传》对公元一世纪至三世纪的日本列岛有比较详细的记录，“奴国”、“投马国”和“邪马台国”都是当时国势强盛的大国。

本文认为，“出云国”的前身就是《三国志·魏书·乌丸鲜卑东夷传》提及的“投马国”，而“投马国”又曾是“奴国”的“投马”地区。三者互相取代交替，其年代及文化特征大致如下：

公元前一世纪末，“奴国”向汉王朝朝贡；公元57年，受到东汉光武帝册封，得金印一枚。该印蛇纽，刻有“汉委奴国王”五字。

二世纪中叶，“奴国”的“投马”地区从“奴国”中独立出来，成为“投马国”。《古事记》和《日本书纪》提到的“大国主神”是其缔造者，稻作是其主要文化特征。

四世纪中叶，铁文化传入而“投马国”由此改称“出云国”。《古事记》和《日本书纪》提到的“素戔鸣尊”是其第一代王，冶铁是其主要文化特征。

六世纪前期，“出云国”为“邪马台国”所灭，日本历史进入中央集权时代。

总而言之，“出云国”涉及日本“弥生”与“古坟”两个文化时代，阐明其历史渊源对于复原缺少文献记载的日本上古史具有极其重要的意义。